

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：15301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22023

研究課題名（和文）戦後民主主義とハンセン病療養所 長島愛生園を事例に

研究課題名（英文）Postwar Democracy and Hansens' Disease Sanatorium; A Case Study of Nagashima Aiseien

研究代表者

松岡 弘之（MATSUOKA, Hiroyuki）

岡山大学・社会文化科学学域・講師

研究者番号：30877808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：1930年にわが国初の国立ハンセン病療養所として設置された長島愛生園入所者自治会（岡山県瀬戸内市）が所蔵する記録の調査を実施し、おおむね1930年代から2010年代にかけての4,364点の文書
の存在を確認した。これに加えて、長島愛生園が所蔵する療養所運営に関する記録や入所者・職員の手記などを
収集・分析することで、1940年代から50年代という戦中・戦後のハンセン病療養所におけるさまざまな当事者運
動の歴史的展開過程とその意義について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ハンセン病療養所の患者運動のなかで作成・保存された記録に加えて、療養所の運営に関する記録、入所者・職
員らの資料を分析することで、戦中から戦後の療養所では治療薬や社会の変化を踏まえたさまざまな改革の方向
性があったことを確認し、隔離の継続を定めた1953年のらい予防法改正にむけた動向を従来よりも多面的に捉え
ることができた。本研究で作成された長島愛生園入所者自治会の資料目録は今後啓発拠点施設で調査分析の基礎
資料として活用されるなど、ハンセン病問題の歴史的継承にむけた基盤構築にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：I conducted a survey of records held by the Nagashima Aisei-en Community
Association (Setouchi City, Okayama Prefecture), which was established in 1930 as the first national
sanatorium for Hansen's disease, and confirmed the existence of 4,364 documents dating generally
from the 1930s through the 2010s. In addition, by collecting and analyzing records related to
sanatorium management and memoirs of residents and staff held by Nagashima Aisei-en, we examined the
historical development process and significance of the various movements of people affected by
Hansen's Disease at the sanatorium during and after World War II, from the 1940s to the 1950s.

研究分野：日本近現代史

キーワード：ハンセン病 当事者運動 自治 民主主義 地域社会 アーカイブズ ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景 本研究は、1930年にわが国初の国立ハンセン病療養所として開設された長島愛生園(岡山県瀬戸内市)を対象として、第二次世界大戦後において日本社会全般の民主化が進み、化学製剤プロミンという有効な治らい薬が登場したにも関わらず、隔離政策が1996年まで改められなかった歴史的意義を、「公共の福祉」を掲げた戦後民主主義の欠陥としてではなく、法をめぐる当事者の葛藤を踏まえながら考察することを目指して計画した。

(2) 研究の動機 研究代表者はこれまで近代日本のハンセン病療養所における入所者の自治会の成立・展開過程について考察を行い、本研究が対象とする長島愛生園においても自治会の設立と一定の活動蓄積があったことを解明してきた。こうした成果を踏まえ、戦時中にいったん解散した自治会が戦後になって再建され、盛んに活動したにもかかわらず1953年のらい予防法改正運動において隔離が継続したことこそ、日本のハンセン病問題を考えるうえで核心的な問題であると考えていたところ、長島愛生園入所者自治会が作成・保管してきた記録が未整理のままであることが判明したため、その調査・分析を行って実態を解明し、その歴史的意義を当事者にそくして検討することを目指して計画した。

2. 研究の目的

本研究は、戦後の自治会再建から1953年のらい予防法制定の歴史的過程について、これまで全貌が把握されていなかった入所者の自治会活動の記録を分析することで、戦後のハンセン病政策の実像を多面的に捉え、被害・加害として二項対立的に把握されたこれまでの歴史像を相対化することを目指すものである。代表者は、戦後日本においてハンセン病患者の隔離政策が継続したことは、療養者自身の療養所の処遇改善にむけた不断の努力と密接に結び付いたものであると考えている。これは入所者運動を隔離政策の補完する限界を伴うものであったと主張したいのではない。当事者は、らい予防法の改正を幾度となく提起しつつも、法改正が自らの運動によって築き上げてきた療養所それ自身の解体を迫られることへの危機感と葛藤があったといえる。本研究が課題とする1953年のらい予防法改正反対運動にいたる経過は、その起点というべきものであって、戦後民主主義の定着過程と関連させながらその歴史的意義が追究されるべきであるといえる。

3. 研究の方法

長島愛生園入所者自治会所蔵資料というこれまで全貌が不明であった史料群について、目録化を行ったうえで、戦時時代に活動を停止した入所者自治会が再建される過程とその特徴、画期的な治らい薬であるプロミンの登場がもたらした療養生活の変化、入所者に対する選挙権の付与など、基本的人権を保障した戦後の諸改革が療養所に与えた変化、という局面に注目しながら当事者運動の分析を行う。このことは、療養生活上の共同利害を対象とする自治会活動という入所者の自己決定のあり方に基本的な視点に据え、入所者、職員、他園の入所者、園への訪問者や支援者を含む地域社会といった療養所に関わる諸主体の相互関係を総体として把握しながら戦後のハンセン病政策の核心に迫ろうとする点で独自の方法があると考えている。

4. 研究成果

(1) 長島愛生園内の歴史資料調査の進展

本研究実施により、長島愛生園において以下のようなさまざまな資料の所在が確認され調査が進んだことは、近現代日本のハンセン病問題の歴史的継承にむけた基盤構築に寄与することができたという意味において、学術的のみならず社会的に大きな貢献をなしたと考える。

長島愛生園自治会資料の調査 本研究では初年度に長島愛生園自治会が作成・保管している資料についての調査を進めた。その結果、おおむね1930年代から2010年代にかけて作成された4,364点もの資料が存在していることが確認された。これは時期も点数も当初の予想を上回るものであり、バインダ単位での点数を確定することができた。今後、それぞれのバインダに綴られた記録1点ごとの詳細な目録作成とデジタルカメラによる画像データ作成は、引き続き普及啓発拠点である長島愛生園歴史館において実施されることとなった。本研究によって作成されたバインダ単位の目録は、今後の愛生園歴史館における詳細な調査の基礎資料として活用される。

一方で、長島愛生園自治会所蔵文書の調査が進むにつれ、本研究が主たる関心としている昭和20年代以前についての記録の大半は欠損していることも判明した。これは長島愛生園内で1971年に発生した火災によって資料が焼失したためであった。本研究は、その中核的資料である自治会所蔵資料の調査を進捗させることができたものの、研究課題そのものを解明するうえで大きな困難があることが判明したため、調査対象を拡大することとした。

長島愛生園歴史館所蔵の療養所運営資料の調査 長島愛生園自治会資料のみでは当初の研究結果をあげることができない可能性が生じたため、長島愛生園歴史館が所蔵する、療養所の運営のためにかつて公文書として管理されていた資料に調査対象を拡大した。当該資料は、死者の個人情報を含むことから長島愛生園における公開手順にしたがって、研究代表者の所属機関である岡山大学および長島愛生園の研究倫理審査委員会において「ハンセン病療養所の歴史資料からみる癩予防法下の入所者処遇」とした倫理審査を受け、2021年11月にそれぞれ承認を得たうえで、入所者自治会長の同意を得て資料の開示を受けた。また、研究代表者がこうした特定歴史公文書等の取扱いに専門的知識を有することを証明するため、国立公文書館長よりアーキビストとしての認証を受けた。こうした療養所が保有する資料の保存と公開は、各療養所においても課題となっていると考えられるため、公文書管理のありかたをめぐる諸課題について分析した書籍内論文を発表した（松岡 2022a）。長島愛生園療養所運営資料については、本課題終了後も引き続き調査を進めていく予定である。

島田等資料の確認と調査 本研究が療養所当事者にそくした分析を掲げていたため、長島愛生園歴史館と協力して調査を進めたところ、愛生園入所者で当事者運動に関わり、療養所のありかたを厳しく批判した入所者である森田竹次の資料が、未整理のまま多数存在することが明らかとなった。これは長島愛生園入所者の故・島田等が森田ら複数の友人の遺品を収集していたもので、現在は島田等資料として長島愛生園が所蔵している。本研究では、森田の残した手稿の一部を撮影して分析に着手したものの、全貌を把握するためにはなお相当の労力を必要とすることが予想される。このため、「戦後ハンセン病療養所における入所者運動の成立」とする課題を構想して科学研究費（若手研究）を申請したところ採択されたため（課題番号 22K13199）、今後引き続き調査にあたりながら本研究の成果をさらに発展させていくことを目指す。

(2)戦後のハンセン病療養所における多様な論点の発見と分析

一方、本研究で中核的な分析対象として予定していた長島愛生園入所者自治会資料に昭和 20 年代の記録がほとんど含まれていなかったことから、「3. 研究の方法」で述べた ~ という当初論点として想定した分析が困難な状況が生じた。これにより調査対象を拡大したことで、以下のような戦前から戦後のハンセン病療養所における多様な論点の発見と分析に取り組んだ。

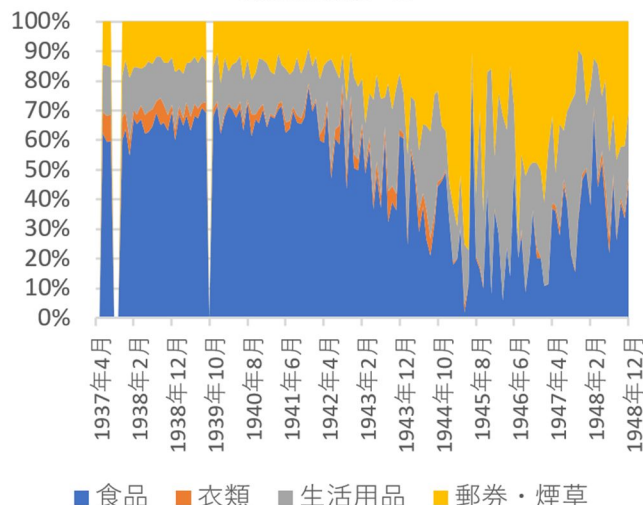
入所者の生活の変貌 昭和 20 年代を含む数少ない自治会所蔵資料として「販売種別日計表」を確認した。これは療養所内に開設され、入所者が作業として経営した小規模な売店における売上状況を記録した経営史料である。療養所内の売店の運営実態はこれまで全く未解明であったが、1937 年から 1948 年にかけての売上構成比（下図）や入所者の収入・支出の構造を分析した結果、売店の売上は菓子など手軽な補食が中心としつつも、さまざまな品目を取扱ったこととあわせて、入所者の生活と相互関係を支えていたこと、療養所内の民主化や没収されていた現金流通の再開といった問題と深く関連していたことが明らかとなった。売店を起点に入所者の生産消費構造の解明も期待される（松岡 2022b）。入所者の生活の具体的な局面から問題を捉えるという方法の特長を堅持しつつ、さらなる論点の開拓に努めたい。

職員の分析 戦後長島愛生園に勤務した庶務課長・井上謙や医師・犀川一夫らの回想記等の収集・分析に努めた結果、社会の民主化や有効な治らい薬登場をめぐる方針の差があることが確認できた。一方で長島愛生園においては戦前から日本のハンセン病問題を牽引しつつきた医師・光田健輔園長が高齢となっており、その後継人事もからんだ駆け引きといった政治状況が見てとれた。こうした職員間の意見の相違は被害・加害といった本研究が相対化を目指す構図のなかで見落とされたものであって、先に述べた若手研究において具体的な分析をさらに進めて論文として発表していく。

(3)療養所におけるジェンダーの考察

長島愛生園入所者自治会資料の欠損を補いつつ、戦後の療養所入所者運動をめぐる論点を拡張する一環として、隣接する国立療養所邑久光明園（岡山県瀬戸内市）を対象に次のような戦時期の考察に取り組み論文として発表した。第一は災害時の患者救助活動中に犠牲となった女性看護師を「顕彰」する建碑をめぐる療養所内の思惑の交錯であり（松岡 2021a）第二は、身体障害を抱えた妻の大部屋生活での暮らし

長島愛生園売店での売上品目
（販売種別日計表より）



の語りをめぐる分析である（松岡 2021b）。ここでは戦時期の困難が戦後の当事者運動の起点となりうることを示唆されるとともに、戦後の運動の展開過程においてもジェンダーをめぐる論点を不可欠であることが確認された。

こうした成果は、自己決定やそのもとでの葛藤に焦点をあてるとした本研究の立場の視点を補強しえたといえる。今後、長島愛生園を含む、他の事例においても検討を進めて、論文発表を目指す。

引用文献

松岡 弘之(2021a). 婦長殉職之碑とその周辺 戦時ハンセン病療養所における職員「顕彰」. 歴史評論. (855). 62-72.

松岡 弘之(2021b). 藤本としいに見るハンセン病療養所とジェンダー リプライにかえて. 歴史科学. (247). 39-46.

松岡 弘之(2022a). 「公文書」. 天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック 付・全国資料ネット総覧』文学通信. 20-65.

松岡 弘之(2022b). 購買部からみたハンセン病療養所 長島愛生園 1937-1948. 文化共生学研究. 21. 1-16.

謝辞

本研究は、2020年に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的流行にともない、海外での研究発表を含む計画に幾多の修正を余儀なくされたものの、長島愛生園入所者自治会および長島愛生園との連携協議を重ねながら、調査を進めて実施することができたものである。疾病が差別をもたらすことがあってはならないとする療養所関係者のご理解とご協力に敬意を表し、深く感謝する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 21
2. 論文標題 購買部からみたハンセン病療養所	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化共生学研究	6. 最初と最後の頁 1～16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 49(2)
2. 論文標題 書評 清水寛著『太平洋戦争下の国立ハンセン病療養所 多磨全生園を中心に』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 障害者問題研究	6. 最初と最後の頁 78～79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 855
2. 論文標題 婦長殉職之碑とその周辺 戦時ハンセン病療養所における職員「顕彰」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 62～72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松岡弘之	4. 巻 247
2. 論文標題 藤本としに見るハンセン病療養所とジェンダー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史科学	6. 最初と最後の頁 39～46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 ハンセン病者と近代日本
3. 学会等名 岡山大学文明動態学研究所キックオフ・シンポジウム「パンデミックと文明 - 感染症と向き合う過去から未来へ - (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 近代日本のハンセン病療養所における生活と自治 「清潔」・「洗浄」を手がかりに
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館産学共同研究「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 婦長殉職碑とその周辺 ハンセン病医療従事者の顕彰をめぐる
3. 学会等名 岡山地方史研究会2月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 近代日本のハンセン病療養所における「自治」とその射程
3. 学会等名 日本保健医療社会学会2020年度第1回関西定例研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松岡弘之
2. 発表標題 大森報告・廣川報告へのリプライ
3. 学会等名 大阪歴史科学協議会11月例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1)図書分担執筆：松岡弘之「公文書」天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック 全国資料ネット総覧』（文学通信、2022年）60-65頁
(2)資料展示会：「ハンセン病療養所入所者の「生きた証」」於・岡山大学附属図書館、2021年12月5日～12月26日
(3)資料展示会：「長島愛生園歴史館蔵「ガラス乾板写真」を読み解く「日出」の定点観測」於・岡山大学附属図書館、2022年4月1日～2022年5月30日

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関